



フランチェスカ＝フジタ＝ベーニッツ

高坂流

銀の閃光が駆けた。スキンヘッドの男の首に巻き付いたそれは、まるで獺猛な蛇のように猪首を締め付ける。

助けろ、死にたくない、なんで俺が。

後方で男がそう断末魔の呼吸で喘いでいるのを、髪長姫（ラプンツェル）——フランチェスカは褪めた表情で笑い飛ばす。その程度で救ってやろうと思えるのなら、どれだけお人よしだろうか。

そもそも殺しに来た相手へかけてよい言葉ではない。殺すか殺されるか、

「おやすみなさい」

銀糸に力が強くかけられる。同時に、ぷつっ、と男の首筋に緋色の線が走った。強く力の掛けられた糸が、その猪首に食らいついているのだ。幾ら己の首に手を伸ばそうとほどける訳もない。

がたがたと男の身体が揺れる。断末魔の喘ぎが苦痛の中に入り交じる。酸素を取り入れることができず、真っ赤になった頭。当然の末路だ。そう言えるだけのことを我々は（・・・）お前たちにされたのだ。

未来永劫、我々は国家社会主義に何をされたのかを忘れない。その後継者を名乗るお前たちのことを忘れない。

否。

ナチスにされたこともそうだ。侮られたこともそうだ。

我々の歴史には、迫害された過去が残り続けている。血に塗れた過去が残り続けている。それは、どのような善行を果たしたとしても、未来永劫残り続ける我々に為したことの罪だ。

フランは、思い切り強く足を踏みしめた。引かれた糸に断ち切られるかのように、男の呼吸がついに途絶えた。それより三分。

「……状況確認」

目にライトを当てた。瞳孔に光を当て、反射がないことを確認。問題なく死んでいる。死体の首筋から鋼糸を抜き取り、死体を引きずって鍵を掛けたドアノブにタオルを掛けて自殺したようにを見せかける。実体はどうあれ、外見上の死因はあくまで自殺だ。

「よし」

勢いを付けてフランチェスカは路地裏の窓へと掛けていく。とん、と血を蹴って窓から彼女は身体を踊らせ、同時に糸に引かれて窓が閉まった。ここは密室。誰も出入りすることのない閉鎖空間と成り果てた。

「フラン、首尾は」

「何時も通り。何も面白い話はない」

古いビートルが道を転がっていく。車通りが多いベルリ

ンの街並にはみすぼらしく映るが、それもまた彼らなりの一つの目立たない個性だ。最悪放置された車と勘違いされるかもしれない。

相棒の語る淡々とした言葉に、ユリアン・ベーンニッツは肩を竦めるしかなかった。これでも彼らの関係は、形式的には父子、または叔父と姪という関係だがあくまでこれもカバーストーリーでしかない。

これも仕事だ。フランチェスカという相棒は、その意味では連邦情報局の活動において非常に有用だし、同時に汚れ仕事の極みを彼女に振ることができるのは大きい。

もつとも、実際にはこの事実が明るみになったとたんにはフランチェスカはもちろんユリアンも罪人まっしぐらだ。結局、この手の仕事については政府及び協力するイスラエル諜報特務庁から二人がともに切り捨てられる可能性がある。綱渡りの仕事だ。

今日の暗殺対象は、ネオナチの信奉者かつ過激派中枢幹部の一人。一般的な絞殺ではなく、明らかな不審死かつ異状死。けれど、それを捜査するより早くこれは自殺だったと結論づけられる。隠蔽された情報は、自殺として過去に踏みしめられる。

「お疲れ。相変わらず時間びったりだ」

1 「手間取ることもないし。警察は？」

「何時も通りの処理で自殺発表。もう筋書きは出来ているらしい」

「そ」

フランチェスカはこういった事柄へ興味を持つことは少ない。今回の仕事でも、モサドの支部に舞い込んだネオナチの過激派が企画していたらしい難民キャンプの爆破計画を受けて、「そ」としか言わなかったほどだ。彼女の徹底した無関心は、仕事へのブレのなさとなって現れる。

『どうせ殺すことには変わらない』

とは、彼女のセリフだが……正直、ドイツ国内も決して安定した状態が続いているわけではないのもまた事実だ。

ネオナチの増加や過激化も幾つかの理由があつてのことだが、一つはやはり中東やアフリカから押し寄せた難民問題があるだろう。

アラブの春によつて政情が不安定になったこと、イスラム教の流入が激しかったこと、そしてその幾らかの割合に国際的な過激派テロ組織が関与しており、彼らの手によつて無辜の市民がテロで殺害されたこと……いくらでも、ネオナチが過激化する理由はあるだろう。

それもあり、ユリアンの所属するドイツ連邦の情報局とイスラエルのモサドは協力体制を敷いている。大々的に公開していないのは、協力が対外的に露見すると主権問題と

もなりうることに、要らないテロを招く形になるためだ。

事実、モサドからの任務は対ネオナチのみに限らない。その半分近くは対イスラム過激派であるとも言えよう。

「……左様で。晩の食事はどうする？」

「肉」

そっけないほどにシンプルな回答が返ってきて、ユリアンも苦笑するしかなかった。フランチェスカはその体軀に似合わず肉料理が好きで、良く食べる。しかし、彼女の協議はどの肉でも許容するわけではなかった。カニキュート戒律に則った食事でなければ彼女は喫食することも許されない。肉の場合には牛肉や羊、または鶏や七面鳥などに限られる。同時にそれらも屠殺の方法から定められている必要があるほどだ。コシエル認定を受けた店に入るのが日常になってしまったため、朝食はまだしも夕食は必然的に外食が多くなってしまふ。フランに付き合う前のユリアンの日常の食生活とは違ふからだ。

「いつも通りか」

嘆息した青年の言葉に、『髮長姫』は頷く。それと同時に、彼女は目を閉じた。己の為したことは正しいことである。それがモサドの指示の元としても、そして彼らから自分がどのように扱われているのか分かっていても、それでもなお正しいことと確信している。

己の胸に腕を当て、そして深呼吸。気取られずに糸を通し、扼殺するまでに大きな音を出すこともなかった。退路における窓からの脱出時にゴミ置場の上に降下しかけ、思わず壁を蹴って音を立てたのが減点。

……ならば、次はそれを改善すべきだろう。私は、私の正しく為すべきことをなす。

車は遠ざかっていく。街の外れにある料理店へと向かって。暫く、ニユースである男が自殺した、という報道が流れてきたが、彼らは知る由もなければ興味もなかった。

---

---

フランチェスカ = フジタ = ベーニッツ

発行日 : 2019年9月26日

著者 : 高坂流

本文書の無断複製・無断複写を禁じます。

---

---